

INTERVIEW

社会医療法人社団健生会
羽村相互診療所 所長

小林 重雄 氏に聞く

羽村相互診療所は、1994年に西多摩地区における透析および一般外来に関する拠点診療所として開設された。開設から20年経過したことによる建物の老朽化と狭隘化が顕著になったことに加え、開設地の賃借期間満了を契機に、現在診療所の在る土地に施設規模を大幅に拡充して、2014年3月、新築移転を果たした。

新築成った同診療所の概要について、所長の小林重雄氏はつぎのように話す。

「新診療所は、旧施設に比べて2倍以上の敷地を有し、3階建ての複合施設としました。1階では外来診療を、2階では開設当初より力を入れている透析治療を実施しています。透析ベッドは、旧診療所で20床だったものを40床と倍増させました。3階には、最近地域からのニーズが大きい居宅介護支援事業所と、にしたま訪問看護ステーションを併設しています。また、隣接する薬局の2階にはヘルパーステーションコスモス西多摩と三多摩健康友の会多摩川支部の事務所があります。これら各機能が集約することによって、外来・透析・訪問診療を担う地域の医療・介護の拠点となっています」

同診療所は、所在地である羽村市はもとより、青梅市・福生市・あきる野市・

東京都●羽村相互診療所



小林 重雄 (こばやし・しげお) 氏

1952年熊本県出身。1978年信州大学医学部卒。同年健生会第二相互病院入職、91年同会常務理事、92年同会総医局長。1995年伊奈平診療所所長、1996年健生会理事、2002年より現職

高齢化が進む都市部の透析医療と地域医療の拠点が最新型の医事一体型電子カルテシステムを導入し、業務の効率化の推進と医療の質の向上を目指す

2014年3月、透析医療と地域医療を支えるべくリニューアルオープンを果たした羽村相互診療所。

透析ベッドを倍増させ、訪問診療や往診など、通院が困難な高齢者への医療に積極的に取り組む。

また、同診療所では透析通信システムと連携可能な医事一体型電子カルテシステムを導入して医療ITを推進。

往診時や透析医療における効率化をはじめ、医療の質の向上に大いに貢献している。

同診療所 所長であり、また長年東京都西多摩地区の地域医療に貢献してきた小林重雄氏に

同診療所の診療の現況と直面する課題に対する電子カルテシステムの有用性等について話を聞いた。

瑞穂町・日の出町・奥多摩町など西多摩地区全域を診療エリアとしており、透析に関しては西多摩地区以外の立川市や昭島市、武蔵村山市からも患者が通院するという。

同診療所で事務長を務める健生会の下野暁志氏は、陣容ならびに診療実績についてつぎのように話す。

「当診療所は医師11名、看護師18名、臨床工学技士6名、ケアマネジャー4名など、合計で58名のスタッフが所属しています。1日あたりの外来患者数は16年3月で約50名、透析患者は約35名、往診が56名です。この周辺には若い世帯向けの新築住宅も多く、子供から高齢者までさ



同診療所2階の透析室。透析ベッドは40床を設置し、臨床工学技士6名が人工透析業務を実施。1日あたり約35名の透析患者が来院しているという



同診療所では透析通信システム「Future Net WEB(日機装)」を導入。電子カルテシステム「Medicom-HRⅢ」と連動させることで、効率的な透析医療を実施している

さまざまな患者さんが来院しています。なお、通院が困難な患者さんに対しては往診だけでなく、送迎車を用いた送迎サービスも実施して集患に努めています」

電子カルテシステム「Medicom-HRⅢ」

透析通信システムとの親和性と機能、実績豊富なベンダの信頼性を評価

新施設オープンから半年後の2014年8月、同診療所では電子カルテシステム「Medicom-HRⅢ(パナソニックヘルスケア)」を導入し、医療の質の向上と業務の効率化を目指した。電子カルテ導入の経緯について、小林氏はつぎのように話す。

「情報の一元管理による業務の効率化だけでなく、紙カルテの保管スペースをなくす省スペース化、紙カルテ特有の医師らスタッフの読みにくい文字・文章に端を発するトラブルの解消、それに国策による医療IT化への後押しなどが電子カルテ導入の契機でした。

電子カルテ選定に際して最も重視したのは、透析治療で導入している透析装置および透析通信システム「Future Net WEB(日機装)」との連動です。それゆえ、同システムとの連携実績を豊富に持つ電子カルテシステム「Medicom-HRⅢ」を選定したのは自然の流れでした。また、同装置が国内でもトップクラスの導入実績を持つパナソニックヘルスケア製であったことも、大きく背中を押した要因となりましたね」

「Medicom-HRⅢ」は、診療所用医事一

・羽村相互診療所・電子カルテシステム構成図・



体型電子カルテシステム。紙カルテのような見易さで、多彩なカルテ表示と入力フォームを有しており、薬の処方や検査、処置、所見、病名などはテンプレート化された画面から選択するだけで簡単に入力できるほか、診断書や紹介状など、患者に手渡す患者文書をテンプレート化。カルテ内容を簡単な操作で作成中の文書

に貼り付けることができるので、よりスピーディーに患者文書が作成可能であるほか、処方歴や検査結果をグラフ化するなどの時系列表示機能も充実している。同診療所には電子カルテ端末が全部で18台設置されており、受付や診療室はもちろん、透析治療室やX線撮影室、処置室等にも設置されている。



「医事一体型電子カルテシステム導入によって、二重入力などの手間や転記ミス、病名チェック漏れ等がなくなり、事務職員による医事関連業務が劇的に改善しました」と話す事務長の下野暁志氏

医事一体型電子カルテシステム 往診・訪問診療にも大いに貢献

電子カルテの評価について、小林氏はつぎのように話す。

「私は健生会の他の施設でも電子カルテシステムを使用していますが、それらと比べても、この施設のシステムは文書管理に優れるなど、使い勝手がよいですね。」

なお、当診療所が注力している往診業務にも大いに役立っています。往診先ではノートPC端末を診療に使用していますが、『Medicom-HRHI』は、同端末から



往診・訪問診療用のノートPC端末。往診先からでも、診療所内にある電子カルテシステムサーバ内にあるデータにアクセスすることができ、診療データ等の入力が可能。情報漏えいの心配をすることなく診療を実施できる

院内の電子カルテシステムサーバに直接アクセスし、診療データの入力等が可能です。ノートPC端末内にはデータが残らないことから、万一端末等を出先で紛失・破損しても情報漏えいやデータが失われる心配がないので安心です」

下野氏は事務長の立場から感じた「Medicom-HRHI」の有用性について、つぎのように話す。

「当診療所が導入している『Medicom-HRHI』はレセコン一体型のシステムなので、医師が電子カルテ上で入力したものが、自動的にレセプトチェックされた上でレセコンに転記されるので、事務職員の業務は劇的に改善しました。」

なお、『Medicom-HRHI』はレセプトチェック機能を筆頭に業務に役立つ多彩な機能がパッケージ化されているのでカスタマイズ化する必要もなかったですし、そのこともあってシステムトラブルもほとんどなく、順調に稼働を続けています。電子カルテシステムは初めてという職員も多く、実際に稼働するまで不安でしたが、若い職員等はすでにITに慣れていることもあって、大きな問題は起きていませんね」

「Medicom-HRHI」にはレセプトチェック機能「点検アシスト」をはじめ、薬剤チェック機能や病名チェック機能など、多彩なチェック機能を多数搭載しているが、このような点についても、小林氏は高く評価している。

「レセプト用の病名入力等で自動的にチェックが入るのは極めて有用ですね。」



社会医療法人健生会 羽村相互診療所

1994年、民医連の空白地域である西多摩に診療所および人工透析施設を併設しようと、民医連の病院利用者組織である友の会（当時は協力会）と健生会が共同で設立したのが羽村相互診療所である。同診療所には、羽村市だけでなく桧原村、あきる野市など西多摩全域（8市町村）の広域から患者が来院する。

同診療所では、人工透析に加え、一般外来では身近な診療所としての医療相談から風邪等の一般的な急性疾患、糖尿病、腎臓内科、神経内科、循環器、小児慢性疾患などの慢性疾患に加え、理学診療など幅広い外来診療を実施。また定期往診を西多摩地域4コースで行っており、「にしたま訪問看護ステーション」、ヘルパーステーション「コスモス」、友の会有償移送ボランティア活動や民医連ネットワークと連携して「安心して住み続けられるまちづくり」を目指した医療活動を実践している。

住 所：東京都羽村市神明台 1-30-5
所 長：小林 重雄

この機能のおかげで医師による入力ミスが減るなど、医療事務の業務効率化に大いに役立っています」

小林氏は電子カルテシステムの費用対効果について、つぎのように話す。

「確かに電子カルテシステムは決して安価ではありません。しかし、透析医療や往診をはじめとする高齢者医療など、地域医療の質を向上させるには重要なツールとなりますから、必要な投資であると思います」



電子カルテシステムを用いて診療する小林氏。「他施設のシステムに比べ扱いやすい」と、システムの使い勝手のよさと、文書管理機能や病名チェック機能などを高く評価している

高齢者医療への対応

訪問診療の充実が課題 医療ITによる地域医療連携強化に期待

同診療所における今後について、小林氏はつぎのように話す。

「団塊世代の高齢化だけでなく、現在は団塊ジュニア世代が高齢化していく時代に入り、訪問診療の重要性が今後さらに高まっていくでしょう。透析医療についても、昔は考えられなかった70～80歳代の高齢者への透析医療が当たり前のように行われています。高齢者への医療にどのように対応していくかが今後の課題です。そのためには医療連携が不可欠であり、当地域でもITを活用した地域医療連携の動きがあります。」

当診療所は、所内にケアプランセンターと訪問看護ステーションを有し、隣接地にヘルパーステーションもあります。これら院所間の連携を深め、1人の患者さんに総合的な対応を進めていきます」